

給仕第一精神の検討

中 澤 要 實

給仕第一！ この精神この實行は今更殊新しい言葉ではないむしろ宗教的にはクラシツクな熟語であらう。されど祖廟中心制度確立されるや、宗門僧俗いやが上にも自覺を持つて叫ばれるやうになつた。さながら埋れたる寶を掘り出してと云はんかむしろ庫中の寶物を展覽に供したと云ふ感じである。いづれにせよ宗門史實の示す傳家の寶訓である。周知の如く宗祖晩年は積極的折伏主義を離れて、外面消極的攝受主義に入られた。三諫するとも用ひられず、山林に身を隠された所は本朝の靈山たる身延山……閑雲野鶴に身を任せ晝は終日妙經の論談、夜は終夜要文受誦と云つた御生活は仙者さながらであつたからであるされど宗祖の胸底奥深く秘められた御心地は二陣三陣の法將の教養によつて完遂する廣宣流布の大願を成就する礎石を作らんが爲であつたのである。身延を中心として繰り擴げられた繪卷は實に麗しい師弟間の宗教的情誼であり、行規であつたのである。御在世に於ける六老僧の薪水給仕。阿佛房の佐渡よりの登詣給仕。内房尼への教訓、其他十方檀越よりの供養給仕等御消息文を拜してもよく知る所である。又滅後に於ける守塔輪番制皆末代門下にのこされたる給仕の龜鑑である。法華經提婆品に

も見ゆるが如く薪水常座等をなして佛になり得たと説いてある法華經が内典の孝經たる生命もこの提婆品に出でゝゐるのを見ても如何に給仕第一が佛になるの道なるかは持つて明瞭であらう。我が宗門は組織的給仕方法として大法燈會を生むに至つたされど徵集方法の組織立てだけでは駄目である。「昔はよく信者は給仕したものだ。僧侶もよく給仕したものだ。」の昔話だけで教化は益々至難となるであらう。御燈明をあげないではおられない必然的行動にまで進ませる教化が必要である。佛にあげる燈明は我が前を明るくするものである果を知らしめて因縁行を起さしめるのでなくてはならない。世の多く誤解を生む人は給仕とは奉仕することなれば結局使はれる事だ。功利的に考察すれば損をすることだと考へる。この心持から訂正する必要があるらう。

殊に近時の學生の若い頭から考へると實に消極的な反面壓制的な感じを享けるであらうと思ふ。それは何故か。因襲的教團にこもる僧侶の姿を神々しいとか尊々しいと考へる既成觀念より、むしろ骨董の人格と思ひなす傾向があると同時に有價値たらしめる老僧手段のやうに考へ價値である。元來若人は突飛を

好み冒險を愛す性質を持つてゐる。善悪は暫らく措き從順を生命として給仕せよと説くのであるから甚だ心よく感ずる事は出来なからう。此の点が若き心に對する給仕精神の不滿が存するものでなからうかと思ふ。

もう一つ奥へ進んで本佛や宗祖への絶對奉仕を給仕と名くるのだから、信仰氣風の深い青年であるならば、たゞちに肯首するであらう。宗教心を持たない青年の思想からすれば、どうも後生願的行爲の如く釋いて不活潑な感じに受取るのである。そうした極端なる反逆は青年僧侶の身であり乍ら俗界に飛び出すやうな結果さへ生むに至つておる事實もよく見る所であらう。今や宗教の魅力は青年的思想からは凡そ無意味なものと化したのであらうか。

師嚴道尊は本化行法の掟である。佛になる道は師に仕ふるには過ぎずと云ふた祖訓もある。宜なる哉、その往昔、至孝第一の日朗上人や弟子信徒悉く宗祖への給仕は佛への給仕と心得ておつた事は眞實である。同時に宗祖の自覺も偉大なものであつたのである。「末代の法華經の行者たる日蓮に供養する功德は釋尊への給仕にも勝る」とまで云はれておる消息文がある。かく意譯して見ると「釋尊よりおれが偉い。おれに供養せよ」と云つた宗祖本佛論にもなりそうであるが宗祖は左様な増上慢の氣遣ではない。即ち法華經は釋尊の出世の本懷經なれば、この釋尊のお心持を眞に説くものは唯我れ日蓮一人のみである。日蓮を供養して生かす事は釋尊を生かすと云ふた活殺觀が日蓮上人

の背にあつたらばこそその言である餘談ではあるが注釋をしておく。斯程までに宗教的信念と自覺があつたらばこそ不惜身命の護法的給仕も出来したのである。世紀はめぐる地球は一週轉した今日の師弟間はどうかであらう。疑惑の多い師弟關係である弟子は師の人格に疑念を持ち、師は弟子よりも吾兒可愛い。これではうまく行く道理はない。弟子は法子、愛兒は肉子。法は貴く俗縁は卑し。されば弟子こそ大切であると云ふのが大道の條理であらうが、末法無戒の僧侶は煩惱の子なり。俗縁情縁が強い世の中。むしろ俗縁なりに美しさを作るのが宗教家の生命であらうと私は思ふ。故に給仕精神をこうした中に求めやうとする事は至難となるであらう。むしろ師弟同行の給仕こそ不平不満なく導く所以であらう。此處に於てた消極性の給仕精神は積極性を帯びてくるのである。「師弟諸共に眞に本佛給仕の精神に生きよ」これが第一條件であらう。これが行はるれば師弟間の給仕精神も必ず自然に解消するであらう。元來給仕の精神を簡単に茶坊主精神に解するから不平不満が生ずるのである。茶坊主的行爲もなきにしもあらずだが其の中に給仕の大道を見出すならば進んでなして行くやうになる。吾等は此處に理想と希望を持たねばならぬ。私は積極的に給仕をすゝめる。「汝専ら給仕せよ。求めて給仕せよ。然らば汝又給仕され、求めて給仕さるゝであらう」と云ふ言葉を味つて貰ふ。蒔けば生へるが蒔かぬ種は生へぬ」と古諺にもあるやうに下種結縁は末法教化の方法である。此處に永生相續の理法がある。我等は我等の生活

を考察して見よう。一生給仕の生活である。人の親たるや子を養ふ、これ子育の義務は求めての苦勞である。無料奉仕の生活である。子育ては、とりも直さず子へ給仕である。やがて親老ひて子が親を養ふ否給仕するのである。とれを名けて孝と云ひ前者を名けて愛と呼ぶ。これ皆給仕に外ならないのである。本佛の徳用は愛であり慈悲である。本佛に主師親の三徳あり。故に主人も師匠も親も皆本佛の垂迹であり。垂迹即本地の体なれば師に使ふる事の最も大切である事を知るであらう。實に法華經は内典の孝經である。吾等の生活は本佛鉢内の生活である。所作佛事である。考へれば何事にも不平も不満もなくなる。更に給仕の具体的方法についてのべて見やう。今更云ふまでもなく、昔から云ふ如く「坊主は御經」の供養方法が第一である。清掃茶菓香花を供へて三寶祖師に師弟諸共に給仕すべきである。弟子たるもの師にはよく給仕すべきである。實に佛になる道は師に仕ふるには過ぎずの祖訓を實踐すべきである。何故かなれば師弟三世の契りは、よくくゝの因縁があつたればこそである。いさゝか婆呉ひかも知れないがどうもそうらしい。故に誠心を持つて給仕せよ。譬へ師たる人自分より知識低くとも、眞に佛になる道は師により授けらるゝと云ふより自然體得の道が生ずるであらう。師に給仕してゐることによつて自然智を得るに至る。本尊抄に彼の因果の功德を譲り與ひ給ふと云ふ受持讓與の文證を知るであらう。受持三業唱題の身に讀むの一字は給仕第一の實行を意味するものであると信ずる。是好良樂の唱題行も

宗教禮拜的のみ使用すると考ふるならば誤りであらう。與へらるゝ所産は氣狂信心、氣狂題目となり價値である。されど本尊禮拜によりて感應を得んとする時は、この氣狂位でなくては主客未分の境地は出でない故、誠の熱意のほとばしりとして必要である。

以上は寺門内に於ける禮拜的給仕方法であつたが、更にこの給仕精神を社會的に如何に給仕すべきか。此の点象牙の塔をぬき出でゝと云ふ感じの一示唆を得るであらう。宗教家の社會的活動の奉仕を給仕精神の社會的進出と名づける。一体宗教家は精神活動をし乍ら案外經濟的にとらはれてゐる。先立つものは金の世の中、仕方があるまいが施餓鬼を説き乍ら、おのれが餓鬼になる事が間々ある注意すべき事である。事情のゆるす限り勇敢に大慈悲心の發動として公益事業に、慈善事業に、或は街頭に獅子吼する等の具體的教化方法は賢明なる諸聖のよく實行しつゝある所である。この方法は法人時處伴、教材時國宜しき得、自己本來の天分を發揮してやつて頂く事は今更贅言を要せまい。

以上雜駁ながらも給仕精神が本化行法の第一要件であると云ふ事を説いた積りである。その中特に消極的と考へる精神を積極性のものであると述べた所に論点をおいたのである。最後に願ふ所は勇敢に實行して頂く事あるのみである。今や國をあげて報國を説き奉仕をすゝめてゐる。國家總力戰の原動力は此處に發見された。廟前の大法燈は眞の興亞の大法燈たらしめよ。

その信念氣魄は宗祖の前に赤裸々になげ出した懺悔の道から出發しなければ眞の法燈は輝かないであらう。風來らば消ゆる長者の萬燈の末路は哀れである。貧者の一燈のみでも心細い、消えざる長者の萬燈を掲げしめよ。それには能所一体の本佛給仕

の精神の光こそ消えざる長者の萬燈であらう。諸天晝夜常爲法故」の信念ある所、守護がある。四海同歸妙法の眞の前提は給仕にあると結んで擱筆する。
(昭和十五・七・五脱稿)

絶對的現實

具體的な人間は日本人であるか、ロシア人であるか、ドイツ人であるかでなければならぬ。生物學の上で云ふ人間や、或能力の主體としての人間はその内容が凡て一様であり、しかも一個で完結したもので抽象的な智識の産物である。併、具體的な人間は必或種族でなければならぬ。一人の人が日本人であること云へば、その人が日本種族に屬してゐることになる。ところで種族に屬すると云つても種族と云ふものがその人の他にあらぬのではなく、その一人が日本種族なのである。また種族とは多人數の單なる集りではなく一人々々が種族の中に生れるのである。つまり個體は種族の全體を離れてはありえず、種族の全體は個體を離れてはありえないと云ふことが具體的な人間の眞の在り方なのである。個人主義とか自由主義とかの誤りはさきに擧げたやうな抽象的な立場に終始して、かゝる具體的な人間

幡 上 教 妙

を忘れた點にある。我日本は古來民族の大宗家に當らせ給ふ皇室を中心として、君は民の心を以て心とし給ひ、民は君の心を以て心として一君萬民一多相即して生々發展して來たのである。

大乘佛敎は全體を表すに法界の語を用ひ、その中に於て自己の作佛は自己の作佛であり、自己の作佛は自己の作佛であると説き、衆生の爲に大悲を發して自己を忘じ、衆生の爲に自己を捨てることを説いてゐる。我國體も大乘佛敎も人間の眞に具體的な在り方に根底を有するものであつて、そこに悠久性と眞理性とを持つと云はねばならぬ。

具體的な人間が種族を離れてはありえない以上、個人は種族の持つ傳統を免れることはできない。種族の傳統は統制力となつて作用する。併、種族の全體は個人の自由を許し、これに反して個人は種族の統制に自發的に博力することが出来る。種族